

生への畏敬

さる九月五日の朝、アルベルト・シュヴァイツァー博士が、アフリカのガボン共和国のランバレネにある自身の病院で、九十歳の生涯を閉じたという報は、世界の人々を悲しませた。

博士が夫人とともに赤道アフリカのランバレネに渡ったのは、千九百十三年三十八歳のときであった。それ以来五十余年のあいだ、不幸な現地人の医療奉仕にすべてをささげてきた。千九百十五年九月のある日の夕方のことである。博士たちを乗せた船はオゴーウェ川を上流に向かって

走っていた。そこはランパレネから七十キロの下流で、川幅は一キロにも及ぶ地点であった。船は中の島に沿って進んでいたが、ふと左手を見ると、砂洲の上を四頭の河馬が子どもたちをつれて船と同じ方向にゆっくりと歩いているのがみえた。そのとき博士はひどく疲れて元気がなかったが、とっさに、自分の知っている限り、これまで一度も聞いたことも読んだこともない、「生への畏敬」ということばに思い当たったという。そして同時に、これこそ自分がさんざん苦勞している問題の解決を中に含んでいることばであることを悟ったともいう。

「生への畏敬」が、原始林におけるその後の博士の思索と実践を貫く根本思想となったことは、人のよく知るところである。このことばが博士の脳裡にひらめいた瞬間は、あたかも求道者が難行の末ふとしたきっかけで悟りをひらく瞬間にも似ていたといえようか。ともあれ、「生への畏敬」の倫理によって、われわれは森羅万象と精神的に結びつくことになる、という博士のことばに、複雑な人間関係や国際関係になやむ世界の人々は、今こそ謙虚に耳を傾けるときではなかろうか。

(昭和四十年十一月)